



『梟書茶房』と読書体験



今年の二月、幾日かを池袋で過ごす機会がありました。目的地へ向かうのに便利だという理由で滞在地として選んだのですが、多くの人が行き交う駅は迷子になりそうなくらい広く、地図の把握が苦手な私は、「東京芸術劇場方面」という案内表示を必死に辿っていかなければ、宿泊先のホテルに到着するのも大変なほどでした。それでも、日々を過ごしているうちに、その『東京芸術劇場』を中心に、周辺をあちらこちらと歩く楽しみをおぼえました。

『梟書茶房』の存在を知ったのはそんな散歩の途中のことです。そこが巷で話題のブックカフェだということは後で知ったのですが、その時の私は何も予備知識がないまま、ただ「梟」と「本」と「珈琲」という「好きなもの」の組み合わせに魅かれ、ふらりと立ち寄ったのです。

『梟書茶房』はビルの4階にあり、お店の前では席を求めて入店を待っているらしい何人かの方々がいました。そして、会計カウンターの並びに置かれた抽斗付きカウンターの上の本（正確にいうと、そこにあったはずの本は人気のためか、かなりのものが品切れで、それはその場所におかれたカードのようなものだったのですが）を読んでいる人がいました。近寄ってみると、カード1枚1枚には異なった文章が書かれていて、読んでみると書籍の紹介文らしいのです。カウンターの反対側の壁には本棚があり、梟と本棚の印刷された揃いのカバー紙がかけられた本たちがずらりと並んでいました。本は1冊1冊に番号が印字され、カバー紙ごと透明な袋に包まれていて、題名も中身も読むことができない「袋とじ」状態で並んでいます。統一感のあるその棚から本を取り出してみると、どれも表紙の部分にそれぞれ紹介文がついています。

つまり、ここは本来ならば選書の決め手になるような題名や装丁、内容等の情報が一切隠された本を販売している書房なのだ、と、私は理解しました。本を選ぶ手がかりはその形、大きさ、厚さ、値段、付与された番号、その本についての案内人の紹介文……

……なるほど、と、私はその意図や試み（企み）を思って、だんだんと愉しくなりました。

この書房は一愛書家の書斎のよう。そこは誰にでも開かれ、本との出会いが今までに経験したことのない形で提案（提供）されている……ひそかに読み手を待っている1冊1冊がひとつひとつの奥深い世界へと通じる扉で、私たちはそれらの扉の前に立って、愛書家からの「案内文」や番号を頼りに選んだ扉をひらくことができる……。

さあ、自分はどの扉を開いてみましょうか、と、ひとつひとつの本の案内を読みながら私は考えました。今日この時間に縁あってこの場所を訪れ、偶然に出会った名前もしらない一冊の本が、私にとってどんな存在になるのでしょうか……そんな思いで私が選んだ最初の一冊。「案内文」がこちらです。

No. 0273

野山を駆け回り、虫を取って遊んだ少年時代をもって成長した大人たち。養老孟司、北杜夫、福岡伸一、茂木健一郎。心の奥底にある自然との交わりの記憶は、彼らの思考に大きな影響を与えているのです。

※原文ママ

かつての虫とり少年はもちろんのこと、お子さんのいる方や、ペットを買おうか迷っている方にもおすすめの一冊。

自然や生きものと関わりあい、学ぶこと。その体験は、言葉で説明できない豊かさを、身体の隅々にまでもたらしてくれるのかもしれない。



書名は敢えて書きませんが、夕暮れのホテルに戻ってひらいたこの本は、医学・工学・文学・芸術等、様々な分野を極めていらっしゃる偉大な方々の人生（共通しているのはその根っこに虫へのきらきらした憧れや深い関わりがあるということ）が沢山詰まっています。本当に面白く、読み応えがあり、私に懐かしさと敬意を感じさせ、知的刺激と豊かな学びを与えてくれました。

そして私は、時の流れや今の時代を思い、ささやかながら自分が育った山の環境を思い、同じくその山で育った娘が小学生の頃にオニヤンマの羽化を目にした感動を「あのね帳」に綴っていたことを思い出して、『ファール昆虫記』やヘルマン・ヘッセの『少年の日の思い出』をもう一度読みたくなり、庭で身近な生き物を観察してみました（ハンミョウを最近見なくなったことにも気づき、はっとさせられました）。

きっと自分ではめぐりあえなかったこの一冊との嬉しい出会いに感謝しています。

さて、私がこの本と出会った本棚は「ふくろう文庫」というのだそうです。本棚の並びには『梟書茶房目録』という冊子も積まれていて、「ふくろう文庫」のNo.1からNo.1231の「案内文」を番号順にまとめて読めるようになっています。この目録をゆっくり読むのもまた面白く、選んだ本とともに購入してきました。

1000冊以上の本の情報を一気に読むのはなかなか大変ですし、それ以上に何だか勿体ない気がして、私は日々のちょっとした時間に少しずつ読むのは楽しんでいます（歯薬図書館のスタッフの休憩室にも置いてありますので、ご興味のある方はお声がけください）。

目録の中身はおそらくほとんどがしらない本（気になる本が色々あります）なのですが、時折「これはきっとあの本」と確信が持てるものもあります。例えばこちらがそうです。



No. 0063

「君はだれ？」「教えて、わたしに。」

荒れ果てた洋館の裏庭は子どもたちの格好の遊び場。でも、あるできごとをきっかけに足が遠のいていた少女が、ふたたび裏庭へ向かうと不思議な声がして――。

日常とファンタジー、ハレとケが混じり合い、少女はさらに深く自分を知ることになる。端正に紡がれた物語。

これは歯薬図書館でも所蔵している本で、私自身も大切に持っている一冊です。

本を読んだ立場でこの「案内文」を読むと、いかに端的にこの本の内容や魅力を伝えているかということにも気づかされます。コンセプトコーナーのPOPをいつかこんな風書いたら良いな、と思います。

この文章の最後にご紹介しておくと、「ふくろう文庫」の案内人は柳下恭平さんとおっしゃる方で、書籍校閲の専門の会社『鴉来堂』代表、書店『かもめブックス』店主でいらっしゃるそうです。柳下さんと『ドールコーヒー』の珈琲の達人である菅野眞博さんが、本と珈琲の魅力を伝えようとしてつくられたのが『梟書茶房』です。

(参考 <https://www.doutor.co.jp/fukuro/>)

紙面の都合で書ききれませんが、店内は私が最初に立ち寄った「シークレットな本屋さん」（ふくろう文庫）の他に、ラウンジ、図書エリア、アカデミックエリア（図書館の閲覧席のような席が並んでいます）、森の部屋、グリーンテラスなどのエリアに分かれていて、食事やお茶をいただいたり、本を読んだりして過ごすことができるようになっていました。

今回の池袋滞在中、私は二度この『梟書茶房』を訪れましたが、二度目はお店の窓際にある図書エリアの二人掛けの席で、娘と美味しい珈琲をいただきながら、店内の自由に閲覧できる本を、時を忘れて楽しみました。帰り際、受験生だった娘が「ああ、久しぶりに本を読んだな」と呟きました。

情報手段や情報網の発達で、書店に行かなくても本の情報や現物は手に入りやすくなりましたが、読書は「体験」なのだと思えば感じる機会になりました。本と出会う、その世界を堪能する、そのための時間と場所を大切にしたいものです。



(旅する司書)